The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	主題句に現れる「も」について
Author(s)	榎原, 実香
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62031
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

主題句に現れる「も」について

榎原実香

1.　はじめに

現代日本語の「も」は品詞の分類上「は」と同等に扱われるにもかかわらず、主題の「は」と「も」との統語的関連性については議論の余地がある。本稿では、「は」と「も」との平行性を、主題を表す句（以下、主題句[1]）を通して統語的に捉えることを試みる。

1.1　主題の「は」と対比の「は」

主題を表す助詞として一般的に知られているものは「は」であるが、三井（2001）は野田（1996）[2]をもとに、主題の「は」のみに見られる以下のような特徴から、主題の「は」が対比の「は」と区別されることを述べている。（三井 2001: 68 より、例文は筆者による）

(a)　性質叙述の文にあらわれる。
　　受付の女性は、この上なく美しい。
(b)　事態目当てのモダリティ要素と「呼応」する。
　　太郎は[ここに来る前]女性と会っていただろう。
(c)　連体節の中には入らない。
　　[#太郎は気に入った映画]が、テレビ放送されるそうだ。[3]

しかし、上記の記述だけでは「は」が主題、対比どちらであるかを判別することはできない。(1)のように性質叙述を表す文であっても文脈が整えば対比の「は」として生じることもでき、主題の「は」のみに見られる性質ではない。また、(2)のように連体節の中に入らない対比の「は」も存在し、対比の「は」のみが連体節の中に入ると言い換えることもできる。そのため、(a)(c)の条件は主題の「は」を抽出するのに必要十分な条件であるとは言えない。

(1)　わたしは背が高い（が、弟は背が低い）。
(2)　わたしは、[#太郎は近くに住んでいた大学]に 2 時間かけて通っていた（が、花子は大

[1] 本稿では、主題句とは TopicP のことではなく、TopicP の指定部にある名詞句を指す。
[2] 野田（1996: 7）は「「は」は基本的には主題を表す助詞であるが、主題を表す働きが薄れ、対比的な意味が強く感じられることがある」と述べている。
[3] 「#」は、主題、ぼかしに関する議論の中で、対比の「は」、累加の「も」としての解釈ならば容認されるが、主題の「は」、ぼかしの「も」としては解釈されないことを示す。

学進学を諦めた）。

よって、主題の「は」の特徴として残るのは(b)の文末呼応のみであり、対比の「は」と主題の「は」は相補分布をなしているとは言えない。むしろ、対比の「は」が主題の「は」より分布が自由であることからも、対比の「は」の中の特定の条件下にあるものが主題として機能するとみたほうが、統語的に考察する上では妥当であろう。本稿では、寺村（1991）にならい「は」の基本的機能を「対比」とし、対比の相手の存在が薄れた場合に「主題」の解釈を受けるという立場をとる。

1.2　ぼかしの「も」と累加の「も」

日本語研究において、「も」の意味機能には現代日本語の「も」の意味として典型的な同類の事態が想定される累加の「も」の他、「文のある要素をとりたて、同類のものがほかにあることを漠然と示すことにより、文全体の意味をやわらげる（日本語記述文法研究会（編）2009：26）」機能を持つぼかしの「も」が存在することが指摘されている。

(3)　3 月も雪が降る。
(4)　3 月も終わろうとしている。

(4)は同類の事態が想定にくいぼかしの「も」の例であると考えられるが、中尾（2007）は並列する事態が想定しにくい「も」を統一的に扱い、それぞれ「同類」ではなく抽象的であるものの想定される事態が存在するとして、累加の「も」との連続性を認めた。以下に、それぞれの「も」によって想定される事態と例文を列挙しておく。

(5)　「典型例表示のモ」[4]：「も」で取り立てられた概念の中で最も典型的なもの
　　夏も真っ盛りです。（夏の中でも、真っ盛りの夏）
(6)　「潜在的意識活性化のモ」：一般則
　　お前も年を取ったな。（人間は年を取るもの）
(7)　「解釈のモ」：「も」をもつ命題における解釈とは異なる解釈
　　その財布もずいぶん使い込んでいるねえ。（財布が乱暴に扱われた等）

---

[4] 典型例表示のモには、以下のような名詞句に類似した使用が存在することも認められ、統語的な観点からも異質なものと分析することも可能であるが、本稿では、以下のような構造が可能な語の組み合わせは非常に限られているため、名詞句的なものは慣用句として使用されていると仮定し、典型例表示のモ自体は含意される事態が想定しにくい「も」として扱うことにする。
(1)　[{ 宴 / ??パーティー } もたけなわ]の頃ですが、そろそろお開きにしたいと思います。
(2)　[仏の顔も 3 度まで]の性格なので、もう少し様子を見てみようと思う。

以上から本稿では、累加の「も」と他の事態が想定されにくい「も」は連続的であることを認めた上で、同類の事態の想定が義務的かどうかを判定の基準とし、その想定の必要のないもの、すなわち累加対象の存在が薄れたものを暫定的にぼかしの「も」（「柔らげ」、「達成」、「詠嘆」とも呼ばれる）と呼び、議論を進める。

1.3 「は」と「も」の階層

主題の「は」、対比の「は」、同類（累加）の「も」、柔らげの「も」をそれぞれ文末呼応との関係から個々に分析した野田（1995）は、対比の「は」と同類（/意外）の「も」の階層は肯定否定、主題の「は」は事態へのムード、柔らげの「も」は聞き手へのムードの階層ではたらくものであるとしている。しかし、主題の「は」とぼかしの「も」の平行性を捉えた三井（2001）は、弱い従属節の中にぼかしの「も」が入る例も存在するとし、ぼかしの「も」は主題の「は」と同様事態に対するムードの階層であるとしている。本稿でも、以下のようなぼかしの「も」の特徴を出発点とし、詳細なデータの観察を行う。（以下、下線、記号は筆者による）

(8) おまえ<u>も</u>大きくなったな。（野田 1995: 23）
(9) #息子さん<u>も</u>大きくなりましたか？（野田 1995: 23）
(10) この辺り<u>も</u>ずいぶん変わったが、ここの空き地だけはそのままだ。（三井 2001: 71）
(11) お前<u>も</u>無事大きくなって、お父さんは一安心だ。（三井 2001: 71）

以上の観察より、対比の「は」と累加の「も」、主題の「は」とぼかしの「も」は意味的な関係性があることが考えられるが、統語的な特徴においても同じように位置づけられると仮定し、「も」と「は」を並行的に分析する。

2. 主題句の統語構造

2.1 主題句の生成

久野（1973）は、三上（1960）の観察に基づきその下に同一指示を示す代名詞の挿入が許されるデータ、無主題文に変えられないデータから、「は」を伴う主題句は移動によって生じたものではなく基底生成されたものであるとしており、本稿でもそれを支持する。[5]

(12) 太郎は、<u>彼が</u>書いた論文が賞を取った。
(13) a. *（魚は）鯛がいい。

[5] Saito (1985) 等は、後置詞句（名詞句）の主題化が移動を伴うことを主張しており、その可能性も考えられるが、後置詞句に「も」が付加した場合、累加の意味を取りやすくなってしまうことから、主題句が移動すると考えられるデータや主題句の移動についての検討は、今後の課題とさせていただきたい。

b. *（あれは、）絶対に、アメリカが悪い。

c. *（新聞を読みたい人は、）ここにあります。

d. *（場所は）屋内説が圧倒的だった。　（久野 1973: 235-236 より）

2.2　複数の TopicP

藤平（2015）では、純粋主題の「は」をもつ句には θ 純粋主題、θ ’純粋主題、場面設定主題（Scene-Setter Topic）、条件主題（Conditional Topic）があり、カートグラフィーの枠組みを援用すると、それぞれの（純粋）主題句が生じる TopicP が個々に存在するとしているが、本稿でもそれを支持する。

(14) [$_{ForceP}$ 条件主題$_i$ [$_{TopP}$ 場面設定主題/ t_i [$_{IntP}$ [$_{TopP}$ θ ’純粋主題 [$_{FocP}$ かき混ぜ句[6] [$_{ModP}$ [$_{TopP}$ θ 純粋主題 [$_{FinP}$ [$_{TP}$ [$_{vP}$ … 対照主題 …]]]]]]]]]

●θ ’純粋主題（×かき混ぜ句）

(15) a. 魚は、鯛がいい。

b. 三和銀行は、坪井君が名古屋支店に勤めています。　（三原 1994: 197）

(16) a. 鯛が$_i$、#魚は、t_iいい。

b. *名古屋支店に$_i$、三和銀行は、坪井君がt_i勤めています。　（三原 1994: 125）

●場面設定主題× θ ’純粋主題

(17) a. それは、魚は、鯛がうまい。

b. *魚は、それは、鯛がうまい。　（三原 1994: 199）

(18) a. 日本では、天然芝生の野球場は、甲子園が一番広い。

b. 天然芝生の野球場は、#日本では、甲子園が一番広い。　（タップティム 2009: 52）

●条件主題（×場面設定主題）× θ ’純粋主題

(19) a. 築地で寿司を食べたい人は、魚は鯛がいい。

b. 魚は、#築地で寿司を食べたい人は、鯛がいい。　（藤平 2015: 30）

c. 築地で寿司を食べたい人は、#冬は、魚は鯛がいい。

d. 冬は、#築地で寿司を食べたい人は、魚は鯛がいい。

2.3　主題句のマーカー

---

[6] かき混ぜ句の現れる位置に関しては諸説あり、他の位置に着地するという可能性も捨てきれないが、実際には主題としての「は」句とかき混ぜ句の着地点は異なり、「は」の解釈にも統語的な違いが見られるため、本稿では藤巻（2011）にならい、かき混ぜ句は FocP 指定部に着地するものと仮定する。かき混ぜ句に関する詳細な検討は今後の課題とさせていただきたい。

(3)　お寿司を、#お昼には、わたしは食べた。

(4)　お昼に、#お寿司は、わたしは食べた。

(5)　お寿司は、お昼に、わたしは食べた。

以上で観察したのは主題の「は」をもつ主題句であったが、丹羽（2000）も述べているように、主題解説関係は「は」のみに見られる機能ではない。上記の例は文脈さえ整えば対比の「は」としての解釈も可能であり、以下のように「は」を「も」に置き換えても主題解説関係は維持される。また「は」に限らず、「など」「って」など、主題に近い意味を示すものは多く存在する。

(20) a. （魚について述べれば、）魚も鯛がいい。
b. （あの状況について述べれば、）あれも、絶対に、アメリカが悪い。
c. （新聞を読みたい人について述べれば、）新聞を読みたい人も、ここにあります。
d. （場所について述べれば、）場所も屋内説が圧倒的だった。

このような事実から、主題句の位置に生起したものは「は」に限らず主題としての機能を示すことができるという想定のもと主題句に「も」を付加したデータを分析し、ぼかしの「も」の統語的な制約についても検討する。

3. 主題句と「も」の分析

3.1 ぼかしの「も」の統語的特徴

累加の「も」とは異なり、ぼかしの「も」が述部内や一定の従属節の中に見られないことは多くの先行研究で指摘されている（野田 1995、三井 2001 等）。以下文頭以外の「も」が累加としてしか解釈されず、ぼかしの「も」や主題の「は」がトキ節に含まれない点に注目されたい。

(21) お前は#年も取ったな。（体が衰え、仕事の経験が増えた）
(22) わたしは、#あたりもすっかり暗くなった理由を知りたい。（三井 2001: 74 より）
(23) [お前も年を取った]と父に言われた。
(24) [お前は年を取った]と父に言われた。
(25) #お前も年を取ったとき、親の言いたいことが伝わるだろう。
(26) #お前は年を取ったとき、親の言いたいことが伝わるだろう。

次節より、文の構造から「も」をもつ句の分析を試みる。藤平（2015）にならい θ 純粋主題、θ ’純粋主題、場面設定主題、条件主題を主な考察対象とし、各主題句位置に「も」が付加した句が生起できるかどうか、ぼかしの「も」として現れうるかどうかを検証する。

3.2 θ 純粋主題

まず、θ 純粋主題と「も」との関連性を見ていくと、θ 役割をもつと考えられる主題句にもぼかしの「も」が生じることがわかる。藤巻（2011）よりかき混ぜ句の着地点を FocP の

指定部とし、FocP と「も」句との関連性を検証すると、以下のように、かき混ぜ句であると考えられる要素に付加した「も」は、累加としてしか解釈されないこと、また、かき混ぜ句の下にぼかしの「も」句が生起させられることがわかる。(27)-(32)のデータより、FocP 指定部にはぼかしの「も」が付加させられず、θ純粋主題が現れる TopicP 指定部には累加・ぼかしの「も」が生起できることが明らかである。

(27) お前も年を取ったなあ。
(28) 今年も終わりに近づいているねえ。
(29) #年も$_i$、お前はt_i取ったなあ。
(30) #終わりにも$_i$、今年 { は / が } t_i近づいているねえ。
(31) 年を$_i$、お前もt_i取ったなあ。
(32) 終わりに$_i$、今年も t_i近づいているねえ。

3.3 θ'純粋主題

次に、「は」句ではθ'純粋主題をもつと考えられる構文に「も」を置き換えたものを検討すると、以下のとおり、累加の「も」との置き換えが可能であることがわかる。また、θ'純粋主題はその下部に位置する命題中の要素と全体−部分の関係にあることが多く、ぼかしの「も」にもそのような特徴をもつものが存在する。

(33) （お祝いの席の準備）赤飯を炊こう。魚も鯛がいい。（魚−鯛）
(34) （多くの知り合いが銀行に勤めている。）田原君は太陽銀行にいます。三和銀行も坪井君が名古屋支店に勤めています。（三和銀行−名古屋支店）
(35) 南は赤道直下に島があります。（南−赤道直下）
(36) a. 南も赤道直下に島があります。[7]
b. *赤道直下に、南も島があります。

以下で、θ純粋主題とθ'純粋主題に位置するぼかしの「も」句を同時に生起させることが可能であることを確認する。以下のように、何らかの評価の対象となるθ純粋主題をθ'純粋主題をもつデータに加えると、その語順が異なった場合は容認されにくくなることか

[7] 典型例表示のモの場合、全体−部分のペアは物理的に切り離すことができないが、それは意味処理を行う上で経済的であるという認知的な理由によるものであり、この場合、「典型例」を指すものは FocP 指定部にかき混ぜ句として生じると考えられる。また、脚注 4 でも触れたように、FocP 以下に生じる典型例表示のモは慣用的な使用であり、以下のように生産的に典型例表示のモが用いられた場合はθ'純粋主題の一種となると考えたい。
(6) *わたしはお昼に和食もお寿司を食べた。
(7) *和食も、わたしはお昼にお寿司を食べた。
(8) 和食もお寿司を、わたしはお昼に食べた。

ら、適当なぼかしの「も」が θ (’)純粋主題の生起位置に生じていることが明らかである。

(37) 冬も、雪の降る日も、終わりましたね。
(38) *雪の降る日も、冬も、終わりましたね。
(39) あの頃は赤ちゃんだった太郎も、卒業の時期も近いねえ。
(40) *卒業の時期も、あの頃は赤ちゃんだった太郎も、近いねえ。

3.4 場面設定主題・条件主題

次に、同じ位置に生成するとされる場面設定主題、条件主題に「も」を生起させたデータを検討する。以下より、詠嘆を表すぼかしの「も」はその意味特質上、条件主題には現れにくいが、その両方とも累加の「も」への置き換えが可能である。また場面設定主題は、指示詞や場所を指すことが多いが、場面設定主題に近いぼかしの「も」句として、副詞的な「それも」や「おかげです」と呼応する「これも」が挙げられるだろう。

(41) これは、道を間違えたかな？（三上 1960: 95）
(42) これも、道を間違えたかな？
(43) 小さなお子様連れのお客様は、奥にエレベーターがございます。
(44) #小さなお子様連れのお客様も、奥にエレベーターがございます。
(45) 成人男性の失業率が増加している。それも、五十代の男性がいちばん多い。
(46) 重版が決定しました。これも本を手に取ってくださった皆様のおかげです。

以上から各主題句の位置にぼかしの「も」が現れることが観察されたが、場面設定主題にあたる「も」句を θ (’)純粋主題と掛け合わせた以下の例からもわかるように、先行の文脈や場面を指示する句は一番上位の TopicP 指定部にしか現れず、また「も」によって他の事態を想定させる必要もないため、ぼかしの「も」句として解釈しても問題はない。

(47) a. 別れの春。それも、太郎も学生生活も終わりに近づいているねえ。
b. 別れの春。*学生生活も、それも、太郎も終わりに近づいているねえ。
c. 別れの春。*太郎も、それも、学生生活も終わりに近づいているねえ。
(48) a. 春に旅行に行くと、日本も桜も咲いているだろう。
b. 春に旅行に行くと、桜も、#日本も咲いているだろう。

以上より、場面設定主題や条件主題にも「も」を付加させることはでき、場面設定主題にはぼかしの「も」が生起可能であること、さらに、他の主題句とは位置が異なり、ぼかしの「も」の複数生起も可能であるということを確認した。

3.5　基底生成

ぼかしの「も」句が基底生成され、主題の「は」とぼかしの「も」が並行的に捉えられることを、久野（1973）をもとに確認する。(49)(50)のように、ぼかしの「も」をもつ主題句は代名詞を挿入させることができる一方、かき混ぜ句にある「も」は累加の「も」としてしか解釈されず、代名詞も挿入できないことから、かき混ぜ句であると考えられる「も」句には移動が生じ、ぼかしとして解釈されうる「も」句は基底生成されると考えられる。

(49) a. 田中さんも年を取ったな。
　　b. 田中さんも彼は年を取ったな。
　　c. #年も、田中さんは取ったな。
　　d. *年も、田中さんはそれを取ったな。
(50) a. 息子も一人前に仕事を任させるようになったんだな。
　　b. 息子も彼が一人前に仕事を任させるようになったんだな。
　　c. #仕事も、息子は一人前に任されるようになったんだな。
　　d. *仕事も、息子はそれを一人前に任されるようになったんだな。

よって、主題句にあるぼかしの「も」も、θ’純粋主題より高い位置にあると考えられるものは基底生成されるということが明らかとなった。

4.　結論と今後の課題

本稿では、「も」をもつ句と主題の「は」をもつ句の統語構造を平行的に分析し、①～③のような点が明らかとなったが、これらから次の(51)のように結論づけられるだろう。

①　「も」句は、累加であってもぼかしであってもどの TopicP の階層にも生じる
②　TopicP 指定部に見られる「も」句のみ「ぼかし」として解釈されうる
③　ぼかしの「も」句は基底生成される

(51) ぼかしの「も」をもつ句は各 TopicP 指定部に基底生成される

野田（1995）、遠藤（2009）等でも議論されているように、各主題句など命題の外に位置する要素は、事態（話し手）へ向けたものから聞き手へ向けたものへと複合的な階層構造をなすと考えられる。また、Rizzi (1997) でも議論されているように、左周辺部にあるものは談話上の情報構造が統語構造に反映されたものであり、本稿で分析した各主題句が談話上で機能し、以下のように各位置でそれぞれの情報が設定されると説明できるだろう。上位、すなわち外側に位置する要素ほど聞き手と共有しておくべき情報や前提となっている情報、下位、すなわち内部にある要素ほど、重要情報といった事態に対する話し手の判断が関わる

情報であり、それらが統語的に反映されていると考えることができる。それゆえ、主題の「は」においてもぼかしの「も」においても各 TopicP でそれぞれのはたらきをもち、複数生起させることが可能なのである。

(52) 別れの春。それも、太郎も学生生活も終わりに近づいているねえ。（=(47a)）

(53) [場面設定主題 [θ’純粋主題 [かき混ぜ [θ純粋主題 [命題]]]]]

↑前提　↑話題　↑重要情報　↑主体

聞き手←　→話し手（事態）

(52)を例に挙げると、文頭の「それも」は先行の文脈から聞き手・話し手両者が前提としなければならない「春」という場面を指し、それに関して補足的な情報を加えることを表している。その次の「太郎も」は「太郎」という話し手、聞き手両者にとって既知の情報であるが、同時に発話時における主な話題となり、それについて聞き手が共感できるような何らかの評価が下されることを示している。また、「学生生活も」に関しては、評価や情意の対象とはなるものの、移動や状態変化が生じる主体を示すという役割の方が大きく、聞き手との情報共有は義務的ではない。以上より、各ぼかしの「も」をもつ句は聞き手との情報共有度によって各 CP 層に位置づけられ、「も（は）」は聞き手と共有されるべき情報から事態の主体までを、上位（外側）から下位（内側）へそれぞれの位置に指定するということが明らかとなった。

今後は、各主題句（ぼかしの「も」句）の精緻化、さらに、文副詞や後置などの CP 層に生じる他の現象についての詳細な検討を課題とし、また主題句以外の CP 層の要素に現れる「は」や「も」を分析することで、談話と統語の関係性を追求していきたい。

＜参考文献＞

遠藤喜雄（2009）「話し手と聞き手のカートグラフィー」『言語研究』136: 93-119.

遠藤喜雄（2014）『日本語カートグラフィー序説』東京：ひつじ書房.

菊地康人（1995）「「は」構文の概観」益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）（1995）, 37-69.

久野暲（1973）『日本文法研究』東京：大修館書店.

澤田美恵子（2007）『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』東京：くろしお出版.

タップティム, ナッティラー (2009)「日本語の主題の位置付けについて —形容詞文を中心に—」博士論文, 大阪大学.

田野村忠温（1991）「「も」の一用法についての覚書—「君もしつこいな」という言い方の位置づけ—」『日本語学』10(9): 80-86.

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』東京：くろしお出版.

外池滋生（1989）「「は、も、が」の論理形式—文文法と談話文法のインターフェイス」『明

治学院論叢』446: 51-75.
中尾有岐（2007）「並列事態が想定しにくいモについて」修士論文, 大阪外国語大学.
日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法 5 第 9 部 とりたて・第 10 部 主題』東京：くろしお出版.
丹羽哲也（2000）「主題の構造と諸形式」『日本語学』19(5): 100-109.
沼田善子（2009）『現代日本語とりたて詞の研究』東京：ひつじ書房.
野田尚史（1995）「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）（1995）, 1-35.
野田尚史 (1996)『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』東京：くろしお出版.
長谷川信子（2012）「現代版「係り結び」としてのト条件節構文—CP 構造における従属節と主節の呼応—」『日本語文法』12(2): 24-42.
藤平愛美（2015）「日本語の「ハ」句の分析—カートグラフィーの観点から—」修士論文, 大阪大学.
藤巻一真（2011）「副詞のかき混ぜと焦点解釈」長谷川信子（編）『70 年代生成文法再認識—日本語研究の地平—』61-84. 東京：開拓社.
益岡隆志（1990）「取り立ての焦点」『日本語学』9(5): 4-15.
益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）（1995）『日本語の主題と取り立て』東京：くろしお出版.
三上章（1960）『象は鼻が長い』東京：くろしお出版.
三井正孝（2001）「モの〈提題〉性—現代日本語の場合—」『日本語と日本文学』32: 65-79.
南不二男（1974）『現代日本語の構造』東京：大修館書店.
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』東京：大修館書店.
三原健一（1994）『日本語の統語構造 生成文法理論とその応用』東京：松柏社.
Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
Rizzi, Luigi (1990) *Relativized minimality*. Cambridge, MA: MIT Press.
Rizzi, Luigi (1997) The fine structure of the left periphery. In Liliane Haegeman (ed.) *Elements of grammar: handbook in generative grammar*. 281-337. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
Rizzi, Luigi (2004) Locality and left periphery. In Adriana Belleti (ed.) *Structures and beyond: the cartography of the syntactic structures*. 223-251. New York: Oxford University Press.
Saito, Mamoru (1985) Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications. Unpublished doctoral dissertation, MIT.